

アホほど

勉強しても

やっぱり

アホ

——善意と正義以上の悪徳はない——

考えないために、大学では単位が与えられ、
職場では給料が支払われる

村尾建吉 著

勉強がアホから逃れられないのは、勉強の中にアホがかかえこまれているからです。

勉強とアホは結託しています。勉強すればするほど、アホのほうが多く成長していきます。

勉強するなかでアホがみえてこなければ、本当の勉強は始まりません。

ことばで語ることは、いつも大事なことを隠している。ことばはその「隠れている」ところに入らなければ、なにも語ることはできない。

人の存在自体が錯誤の大きな固まりのように思えてならない。それは、自分の世界を、自分を超える世界を、ことばで語り尽くそうとする欲求に映しだされているだろう。

「アホが幸せになったためしがない」とか、「血気さかんないアホほど地獄にまで突っ走る」という声が、雷鳴のように轟く。

定価 一、〇〇〇円（税込）

はじめに 2

勉強すると幸せになれるか―秋葉原事件と「バートルビー」 7

「貧困からの脱出」は幸せへの途か

プロレタリアート以下のプレカリアート

秋葉原事件の加害者も被害者も「誰でもよかった」の衝撃

「サイレントテロ」とバートルビーの「不服従」

「しないほうがよい」仕事はしないほうがよい、というバートルビー

バートルビーは「白鯨」の化身^{けしん}か

バートルビー自身にも向かう「しないほうがよいのですが」

バートルビーの徹底した「不服従」

「地動説」を地動説的に掴む 39

ローマ法王の講演を中止に追いこんだローマの学生たち

アリストタルコスの（初期）地動説

人間はどうすれば思いこみの外に出られるのか

各惑星の動きを立体的に浮かびあがらせたコペルニクスの地動説

物体にたいする力の関係の中に運動概念を差しこんだガリレオの「慣性の法則」

運動にたいする「力の加えかた」を宇宙にまで拡張したニュートンの「万有引力の法則」

「地動説」の衝撃のもつ意味

人間の生きかたのロールモデルとしての「地動説」

「地動説」の衝撃はなぜ失われてしまったのか

ガリレオはなぜ、異端審問にかけられたのか

「逃避距離」を越えて火あぶりになったジョルダノ・ブルーノ

神を地上に引きずりおろしたブルーノ

観察する者は観察される者であることを描いた映画『ハーモニーベイの夜明け』

ハイゼンベルクの「不確定性原理」と交差するテーマ

コロンブスの新大陸「発見」とはなにか 93

「大航海時代」の幕開け
奴隷狩りと富の収奪にあげくれたコロンブスの航海事業
世界のグローバル化の推進
新大陸「発見」と「パレスチナ問題」

地動說的展開としての大学闘争 111

パリ5月革命「想像力が権力を奪う」
世界各地で噴出した大学闘争
日本における大学闘争
「勉強してもアホになる」ことをさらけだした大学闘争
沈黙におおわれた授業風景
「共感する心」を育てない勉強はゴミのために
「なんのために勉強するのか」という問い
9・11の衝撃をどのように受けとめるか
吉本隆明的「情況への発言」の限界

労働放棄の中に踏みこむ〈情況への発言〉からの出発
「知の専門化」による暴走
教官ではない存在として〈大学〉にかかわりつづける闘争展開
勉強はなぜ自体を拘束する「単位」を問わないのか

廃墟化が加速している40年後のいまの大学 158

40年後の大学でのビラ撒き敢行
ビラを受けとらない学生たち
三島由紀夫の蹶起^{けつき}とビラ撒き
大学に職を求めていく大学闘争後の知識人
生徒が自分の担任の先生を選ぶ「子ども中心主義」
大学教官であることと文学者であることはどのように対立するのか
デュシャンの便器展示事件以上の黒板へのペンキによる落書の衝撃
40年間占拠され、凍結されている研究室

おわりに 188

はじめに

勉強することは関心をもつことです。勉強して考えれば考えるほど、問題に関心をもつことになり、問題から関心をもたれていきます。しかし、勉強しても関心がもてなければ、それは勉強したことはありません。勉強することよりも関心をもつことのほうが大事であって、関心を掘り起こすためにこそ勉強する必要があるからです。関心をもつことが大事なのは、関心の中に「つながり」が認められるからです。関心がなければ、「つながり」は断たれてしまいます。

関心は他の関心を排除し、無関心の流れにあってはなりません。関心は自足してはならないからです。「つながり」は他の「つながり」を求めて、関心が広がっていかなければならないからです。人はなにかに関心をもつて生きていますが、関心は関心の中に閉じこめられてしまいます。関心は関心の外にたえず出なくてはなりません。小さな関心⇨大きな無関心によって、人と人が分断されてはなりません。

ではどうすれば、関心の外へ出ていけるのか。関心の中にどんどん踏み入って、関心を掘り起こしていけば、否応なしに関心の外に出て、関心は広がっていきます。

関心は人と人の「つながり」にとって、唯一の可能性です。動物のように自然とつながることを忘れつつある人にとって、その「つながり」をつくりだすために、勉強して関心を不断に掘り起こさなくてはならないのです。勉強にそのこと以上の意味はないと思います。

勉強とか学習とか、知識といったことについて考えはじめるとき、民俗学者の宮本常一とその父親のことが必ず思い出されてきます。人間が生きていくために勉強したり、学習したりする原点が、そこに内蔵されているように思われるのです。

つまり、生きることと勉強することが直結しているというより、「生きることとは勉強」といった教えが、その親子の中に脈打みやくちっているのが感じられます。

賢くなければ生きていくのは困難だから勉強するとか、勉強は必ず役に立つし、役に立たない勉強はしなくてよいという響きが、こちらに強く伝わってくるのです。役立つように勉強せよ、ということなのです。同時に、どのように役立つのか、ということも考えなくてはなりません。「役立つ」という一点に引きしぼられていく知識のありかたの強度のまえでは、「勉強すれば賢くなる」とか、「勉強して頭を鍛える」などというのは、戯言ざげんのようにしか聞こえません。

宮本常一を追いつづけているノンフィクション作家の佐野眞一さんの文章に教えられたのですが、故郷の周防大島を出て大阪で働こうとする15歳の宮本に、父親の善十郎はつぎのようなこと

ばを贈ったそうです。

①汽車に乗ったら窓から外をよく見よ。田や畑に何が植えられているか、育ちがよいかわるいか、村の家が大きいか小さいか、瓦屋根か茅葺きか、そういうこともよく見ることだ。駅へついたら人の乗りおりに注意せよ、そしてどういう服装をしているかに気をつけよ。また、駅の荷置場にどういふ荷がおかれているかをよく見よ。そういうことでその土地が富んでいるか貧しいか、よく働くところかそうでないところかよくわかる。

②村でも町でも新しくたずねていったところは必ず高いところへ上って見よ、そして方向を知り、目立つものを見よ。峠の上で村を見おろすようなことがあったら、お宮の森やお寺や目につくものをまず見、家のあり方や田畑のあり方を見、周囲の山々を見ておけ、そして山の上で目をひいたものがあつたら、そこへはかならずいつて見ることだ。高いところでよく見ておいたら道にまようようなことはほとんどない。

③金があつたら、その土地の名物や料理はたべておくのがよい。その土地の暮らしの高さがわかるものだ。

④時間のゆとりがあつたら、できるだけ歩いてみることだ。いろいろのことを教えられる。

⑤金というものはもうけるのはそんなにむずかしい。しかし使うのがむずかしい。それだけ

は忘れぬように。

⑥私はおまえを思うように勉強させてやるができない。だからおまえには何も注文しない。すきなようにやってくれ。しかし身体は大切にせよ。30歳まではおまえを勘当したつもりでいる。しかし30すぎたら親のあることを思い出せ。

⑦ただし病気になるったり、自分で解決のつかないようなことがあつたら、郷里へ戻ってこい。親はいつでも待っている。

⑧これからさきは子が親に孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。そうしないと世の中はよくならぬ。

⑨自分でよいと思つたことはやってみよ。それで失敗したからといって、親は責めはしない。

⑩人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしつかり歩いていくことだ。

この10カ条が、小学校もろくに出ていない善十郎の口から出ていることに、佐野さんは感動しているのです。そして同時代の日本では、こうしたことが庶民のあいだでごく普通に流布^ふしていたといいます。

「関心を掘り起こせ」という教えが、ここにも鳴り響いているのが感じられます。

さらに、父善十郎の的確なことば以外に、親から子に伝えることばが関係としてきちんと成り立っていることにも感銘を受けます。父の教えがこうして残っているということは、宮本が父のことばを財産として後生大事^{ごしょうだいじ}にしてきたからでしょう。

親子関係が成り立つような社会であったことが、この10カ条から窺^{うかが}われます。

「人の見のこしたものを見るようにせよ」という父の教えは、人が見ていないところを見よ、あるいは、人の見えないところを歩め、ということばとしても聞きとれますが、4千日を自分の足で全国行脚^{ぜんこくこうぎや}した宮本の旅の中に、一貫して息づいていたことはまちがいないでしょう。

宮本は杉皮が干してあるというだけの写真から、杉材の運搬にかかわる全労働過程を読み解く力をもっていた、といわれます。日々の喜びや悲しみによって築かれている、「具体的な生活」があつてこそその宮本の見通そうとする力ででしょうが、戦後60年の「貧困からの脱出」をめざして、飽和状態の消費社会の中での日本人の生活が抽象的なものになってしまったなら、見通そうにも見通すほどの具体性はすでに失われている、といわざるをえなくなります。

宮本の活躍していた余地もますます狭められ、人間が鍛えられていく具体的な基盤そのものが崩壊に瀕している危機に、私たちが直面しているのがひしひしと感じられます。

2008年9月10日記

あとがき

「わからないけれどもわかる」という感覚に望みを託して、ギリギリのところまで文章を書いてきました。「わかるからわかる」文章の中で、ことばが消費されていく勢いに巻きこまれたくないからです。読まれることよりも、勉強してください。ことばというものは、読み流されるものではなく、ことばのまえでなんども立ちどまってくれることを欲しているのです。考えてきたことばほど、読み手が考えて受けとめることを期待しています。一度も立ちどまらずに読みすすめられるのは、「わかるからわかる」であつて、自分の「わかる」範囲内にあるそこには、自分が自分の外へ出ていくことによる、「出会い」というものは皆無です。自分が自分を見出して安心しているだけのことではないでしょうか。コミュニケーションは「わからない」ところへ赴かなくてはなりません。本能の代わりにことばをもってしまった人にとつて、ことばが「わからない」ということは、おたがいに簡単には「わからない」ことを物語っているのではないのでしょうか。

2008年9月10日記